

論文内容の要旨

報告番号		氏名	上嶋 昌和
Impact of Transparent Hood on the Performance and Therapeutic Result of Endoscopic Injection Sclerotherapy (内視鏡的硬化療法の手技と治療成績における透明フードの有用性)			

【はじめに】

内視鏡的食道静脈瘤硬化療法において、F0～F1の細い食道静脈瘤に対して正確に静脈瘤内穿刺を行うことは上級者でもしばしば困難である。この理由として呼吸性変動、心拍の影響、食道蠕動などにより穿刺ポイントが一定しないことが挙げられる。一方、内視鏡的止血術、大腸内視鏡挿入など様々な内視鏡治療手技において透明フード装着の有用性が報告されてきている。内視鏡的硬化療法においても透明フードを内視鏡先端に装着することで食道壁に内視鏡を固定することができ、視野確保や静脈瘤穿刺が容易になると考えられる。そこで、今回、内視鏡的食道静脈瘤硬化療法における透明フードの有用性について検討を行った。

【対象と方法】

対象は、形態がF0～F1の食道静脈瘤に対し、内視鏡的硬化療法を行った201例(治療回数510回)である。オリンパス社製斜め爪付き透明フード(MAJ 295/296)を装着した99例(治療回数257回)を「フード群」、フードを用いなかった102例(治療回数253回)を「通常群」と定義し、2群間で硬化剤の静脈瘤内注入成功率、供血路造影率、静脈瘤消失率、累積再発率、有害事象発生率を後方視的に比較検討した。なお、静脈瘤内注入成功率は治療回毎、供血路造影率、静脈瘤消失率は症例毎での検討を行った。累積再発率は、治療後90日以上経過観察(最長観察期間3000日)し得た、フード群81例、通常群90例を対象として、カプラン・マイヤー法を用いて検討した。

【結果】

透明フードの使用により良好な術視野を確保することができた。硬化剤静脈瘤内注入率はフード群73.9%(190/257)、通常群57.7%(146/253)とフード群で有意に高率であった($p < 0.01$)。供血路造影率は、フード群89.8%(89/99)、通常群72.5%(74/102)とフード群で有意に高率であった($p < 0.01$)。効果判定が可能であった188例での静脈瘤消失率は、フード群75.5%(72/95)、通常群79.6%(74/93)と両群間で有意差を認めなかった。累積再発率は、フード群で有意に低率であった($p < 0.01$)。重篤な有害事象は両群において認めなかった。

【結論】

透明フードを用いた内視鏡的食道静脈瘤硬化療法は、供血路までの硬化剤注入を容易にし、静脈瘤の再発抑制に寄与し得ると考えられた。